

今日の説教のポイント <使徒言行録 16 章 1～5 節>

①「ユダヤ人の手前」、テモテに割礼を授けた？

パウロは今日の個所の直前 15 章で、「キリスト教の信仰を持ちたい異邦人は割礼を受けるべきだ」とする意見に対して、エルサレム会議で、「その必要はない」と訴えて受け入れられました。しかし、その直後の今日の個所で、パウロは、ユダヤ人の母とギリシア人の父を持つテモテに、「その地方に住むユダヤ人の手前」、割礼を授けたとあります(3)。これは矛盾しているのではないのでしょうか？ 「～の手前」なんて、パウロらしくないような気がします。

②「福音のためなら、私はどんなことでもします」

この「～の手前」と訳された元のギリシア語は、理由や原因を示す語で、直訳すると「～のために、～のゆえに」です。すなわち、「その地方に住むユダヤ人のために(ゆえに)」です。パウロが一番考えていること、それはユダヤ人たちを「キリストの救いに招くこと」なのです。次のパウロの言葉を思い出します。「私は誰に対しても自由な者ですが、全ての人の奴隷になりました。ユダヤ人に対してはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。～何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、私はどんなことでもします。それは、私が福音に共に与る者となるためです」(I コリント 9:19)。

③「割礼の有無は問題ではない」の本当の意味

パウロは次のようにも言っています。「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることなのです」(ガラテヤ 5:6, 6:15)。相手の状況を無視して、「割礼は絶対にいらない」と叫ぶようになるなら、それもまたおかしい話です。割礼の有無から本当に自由になってはいません。パウロは、「愛の実践」「新しく創造されること」をいつも相手の人を「キリストの救いに導く」ことの中で考えています。キリスト者になるということは、「自分が正しい側に立つ」ということではありません。愛と謙虚さをもって相手を見つめ、「私もあなたも、キリストに赦されて生かされているのですよ」と伝えられる、自由な者となることなのです。